嫩髭蛇物語

五

特
へ遠13
1,298
5上

特
へ13
1298
5

嫩髻蛇物語巻之五

江戸　金亭主人戯編

第九回　狩倉の行交　相思の離別

且説英多巴治郎が危き命を助られ漸く外面に忍びぬぐ。さるほども斯なり。情をゆゑ〳〵其人が家の亭主の賓人が左まれ右まれ吾為ぞ。是活命の恩人なれば其名を問まゐらせけるに。こゝる間どぶ泥ざりけれども道をかゝ顧ずく。臥拜ろく走出るが折節一天俄に曇り。篠を乱るく降雨ふ目刺も知らぬ闇の夜なれば西も東も辨へず。測や〳〵路とむめそふ足ふ任せて二里余も

走るとて覚ゆる折ふし深山鳥の告げ渡るに空うらうらと東雲の方を東と
こうろぎ〳〵。喘息々々漸々と林下の道へ出ぬれば折しも雨も降止て朝日輝く
松並木並び聳ゆる中を出るに始て巴ゆえ過ぎ〳〵思ひとるに〳〵測ゆるに吾家の
門へ走着ぬ頃ゆ門の戸引開く門口なる母人いふゆ在と喧響ゆ母ハ目覚く
打驚き巴治郎なるか何すぞ是遅なり夕ハ只安からんと思ひ佗びく涙せんと
くゑ出ぬ〳〵河水増ぬ〳〵八十瀬川いなる事の過るまく水ハ溺まく失ゆ
又ハ山方ゆ洪河く猪狼の禍ひゆ逢ひく命を墮ぬと老ハ尚更人物事を
案ずまじて眠らまじ今朝雞の告る比思ひ労まくこころ〳〵と真眠折も
見る夢ゆ汝ゆ帰ぬ〳〵典形とうつゝ誠の正夢なりと坐行出く悦ぶ白ハ巴治
郎ハ見く涙ぐまじまく母ハ思ふゆ〳〵ゆ已が過なり不孝の罪を重ぬと兩宿り

せぬ始なり彼山賊ゆ率ゆまく難ゆ逢ゆ終まじく落も残まく語り出まじ
母ハ汝なり打驚き扨も危ゆき事なり〳〵と母子互ゆ語り合恙なるを悦ぬ
斯く巴治郎ハ母と倶ゆ爰ゆ三年の星霜を過ぬるゆ母ハ八十年の程過く老の
病の増りゆまく遂ゆ空〳〵成ゆまじ巴治郎歎き佗つゆ詮方なく哭々ゆ
野辺送りゆ成ぬまく暫ハ此處ゆ住なり〳〵ゆ相摸国の北条ゆ知方の人
ゆまじ其処ゆ便宜く至りゆ憂を凌ぎく居なりけゆ爰ゆ又鎌倉の執権なる
北条義時君ハ甚き馬好なく此程領地ゆ
下なく在せゆ別く秘蔵ぬる乗馬ゆ蛟龍と号らまじ荒馬ありけり一日
是を召まんとく龍人をく牽出まじゆ彼方なる森の茂みく白鷺
の打群居く騫翥々と飛立けるゆ驚きく躍り上りゆ馳出〳〵龍人小者

等打驚き。止めとゝく種々ゐまどゐ。元来畔強の荒馬なれば近寄者を
搔抱き。蹴倒〳〵荒廻り。後ゐ郭外へ馳出ぬ。彼方此方と馳巡れども人々
わるてゝ〳〵とゝ。空く声をかるのこうゝく。止る事成ぬさり〳〵ゐ。三十年余と
見ゆる男の。身ゐ裸裂と打纏ひ。腰ゐ古び〳〵太刀を帯く。衢ゐ出さえ
居さり〳〵ゐ。籠人小者ホ捕へ飽満く。迯佗る成見く走来り。狂ひ馳る肌
背馬の前面ゐ立く手速〳〵も。腮のわるを廻むとゝえ〳〵ゐ。飄と上ゐ飛騎て。
手巾ゐく物取出〳〵。馬の口ゐ喰せつ。鬣多ゐく括り付其を便ゐ二三遍輪騎を
かけて。騎強直るゐ。馬ハ汗〳〵く静ゐ。ぬまゐ口捕等を打招き。静々と牽渡
せば。辞り居る人々ホ舌を巻て感じけ。江間太郎兼時君ハ。樓ゐ打登りく。
馬の馳る成御覧じわる〳〵ゐ。是る光景ゐ感じゆひ。彼者見へと召るゝ人々

件の男を率く。廣庭ゐて坐せ〳〵ゐけゝ。兼時目近く立寄て。有意の者とゐ
見受さり。自ゐ仕る公やゐるゝの。命ゐ彼者畏こく。已ハ往時平家ゐ仕へ〳〵。
御厩の巴治郎〳〵く。下賤の者ゐ〳〵ゐひ〳〵ゐ。老〳〵ゐ母を養ん〳〵。都を退て
伊勢國英多ゐ落魄住折ゐ。程ゐく母ゐ卒ゐく。先頃ゐ此ゐ移
住く候ゐ。ゐ思ゐ下をゐ恵まる。仁義の君ゐ仕へんをゐ願ひけゝと
ゐ。兼時さゝゐと御盃を。巴治郎ゐ下〳〵賜り。是ゐ則巴治郎を厩
の長ゐゐ召ゐる。斯く英多巴治郎ハ。従来心忠直ゐ重く君ゐ仕る
ゐ。程ゐく兼時狐権る。父君ゐ仕え上らゐ。渠を仁智の者ゐ〳〵く。
縣令ゐ成されける。頃ゐ元久一年秋の比及右京大夫義時ゐ。匡根
ゐ狩倉の催〳〵ゐ。仍く英多巴治郎を。路の知方ゐ召ゐけゝ。其日ハ

巴治郎犯権の御先ゐ遥前立つ。狩装束ゐ装る。馬上美々〜く出立て。
匡根の山路を往折節向方より一個の武士従者一人を従へて来るを見
まび是則年頃恩を報ゆんと。尋常〜人るまび頃ゐ馬より飛下りゐ礼
義をるゆひける。其処を過らせゆるび五日恩人つく〜在まゝんと呼ぶて其
人巴治郎が面を不審左見右見し。さ宜べども自ゐ於く。何るを君とも辨へ
ぬ。甚不礼る事ゐてゆるまて苔ゐまび巴治郎ゆく〜まびて。見
忘まゐ去事るまび去る比及伊勢國長世の郷る村長が家すく計ぞ
難ゐ逢ひしゐ君ゐ赦いまび奉り。危き命を助りし。英多巴治郎とまゝん
者ゐ。去頃より江間の太郎殿ゐ仕へ侍り。今武士ゐ数まくまび縣
令の坐ゐ列るゐ。偏ゐ君が大恩るりと。涙るぐふひぐる。折節跡より

確々と。狩装束ゐ出立て。武士七八騎駈来り。馬上るぐふ声ふやく〜そ。
やく〜ふ巴治郎ゐ。今此處へ犯権の速在まるまび司より。貴君を頃
召るるり。ゆで速々と通らまび。彼人光景を閲るゐも自ゐ路の開るまび。
再見え奉らんと。頃ぎ傍を立退けび巴治郎心猶豫不定く。抑何処
ゐ住せゐ。御名ゆ〜さ問ゆ〜と。追及はぞ声かゝまび自る表太と
呼ぶ者るり。跡顧ついひさく。其侭其処を走去し。折柄集る狩倉
の。歌多の従者ホコ隔らま西と東へ別まるり。是るん荏草表太ゐ彼
箱根権現ゐ通夜るゆ〜るり。帰さの折るゆ〜く。一子兎七ゐ産る秋の
事るりけり。偖又巴治郎ゐ其る尚も恩を受し。表太ゐ巡り逢んと。
年比尋需まども。表太とゐひ〜名のみを知く。何処ゐすむとも知ぐまび。

巴次郎途中に暴馬を留む
巴次郎

泰時

其と尋ん便もわゝぐ。空〳〵年とぞ過しける。正是葉話を見れば竭く。
再彼兎七が話説の條ゝ起還不提荏柄の表太い彼箟根の山中る。
旅舎と立出て。鎌倉さゝ〳〵至りつ。爰に英ヨヌ巴治郎とのと呼ぶる何
処ゝ住ものと問べ里人其云ふ。太郎殿の御内る。英ヨヌ左京と呼ぶ
ゆゝるれとのゝが表太い甚喜び。頓て件の江間太郎泰時殿の館へ訪
往て。見い六浦の郷に住む。表太と呼べる者ゝ〳〵。英ヨヌのゆゝに見
度子細のゆゝ訪ひ来るとのひ入まけまゝ取次の従者い主ゝ見とゝ。
左京い表太とゝる名を聞ゝり頃に立出て。ゝまゝ正くゝさのゝ比及箟根
の山路ゝ巡り合ひくゝ公ゝ共も見失ひ。彼恩人ゝ有はまゝ
珍らゝと打悦び。伴ひ入りゝ禮とのべ。偖其ゝ〳〵伊勢國長世の郷る

一條且先年箟根路ゆゝ。見ゝ〳〵のゝ立別まゝ。尚さゝ〳〵ゝ尋ね
需ゝ。光景を審ゝ話説つ又るゝのまゝうへを顧ゝ。往昔情ゝ頑ゝ。
禮謝を數々言出ゝ。最敬ひゝ物語まゝ。表太ゝ答へゝさまゝのゝ
ゝ其折ゝ。貴君のゝをゝゝゝ昔のゝとゝひ出ゝ。訪参らせん
も嗚呼ゝまゝ。折てゝゝゝと過行しゝ。先つ比及巳ゝ主人。和田胤長も
身を果さゝ。主人の家も絶果まゝ巳も今ゝ武士のゝゝを捨て先年
六浦の郷の土民とゝり。一子も見ゝ商人の活業さゝんとゝゝ〳〵ゝ。
此鎌倉の商人ゝ。張六と呼ぶ者の家ゝ渠を遣〳〵活業をさゝ〳〵
此度不意箟根の奥の山寺ゝ。難ゝ逢ゝ〳〵一十始終落も残さゝ話説つ。
犯権ゝりの命ゝりゝ。境を犯ゝ〳〵一子兎七ゝ害るゝ〳〵の事ゝ

庶幾の賄賂のく。渠が命を贖ひぬべき便もあるが。兼てゞ聞る犬権ゝ。
由緒ある君ゝ便りるべ。計らゝ筋もあるんと。面強くも推参〳〵と。光景
審ゝ話説まべ。こゝゝ忠義の一途ゝ効を果さまてゝと。及ぶ和田平太胤長君ゝ。
仕へゝ〳〵君ゝ。さまべ同じ歸倉ゝ等く住く在〳〵も。幼くゝ年頃
尋ね侘ゝ〳〵境を霜〳〵と。親ゝ逢ふる心地〳〵。悦びつゝも語り〳〵ゞ彼免
七ゞ光景をゝく。左京も大きゝ打驚き。眉うち皺めひけるゝ。宮根ゝく
やまゝさる境の。有〳〵いまゞやゝも及ばず。何ゝる子細ありぬべ。さまゞ自ゞ主
え君ゝ。中々さゞり賄賂のく。坂ゝ君ゝわゝゞまゞも。左ゝも右ゝも活命の恩
ゝる君ゝ一子とゝゝ。已ゞ命を拋てゝ。主君ゝ仕へ計らゝべ〳〵とゝゝく從者ゝ
指揮〳〵く。先盞を採出〳〵。表太を種々郷食應つ先ゝ此事いさゝる閑ゞて

事をゝらゝべ〳〵に心痛るゝるひそ。必落着く此處ゝ暫在く吾音信を。
待せゝ〳〵とゝひ捨く。左京ゝ其〳〵ゝ裝〳〵ゝ。袴の端を取直〳〵。開ゞく。主君
恭時の御前をさゝてゞ出ゝける。表太もいゝゝゝゝんと。吾子のゝくをゝひ
ゝく。左京ゞ光景を伺ひく。今〳〵と待ゝ〳〵ゞ其口も頃く暮る比
左京も退出帰り来く。表太ゝ見えくゝゝゝゝ。自ゞ主君ゝ然々の光景を
ゝゝゝ上つまべ。是るゝゝりゝ捉ゝる。事ゝ主君も知召まゞ。其〳〵ゝ深き子細も
ゝゝゝさるゝ渠ゞ光景をゝゝゝ。便ゝ事と宜ひ。頃ゝ此由犬権ゝ見え
ゝく樣々ゝ言を乳〳〵く諫ゝ。其御許容を得ゝく。勝人ゝ命を下
さまゞ事の始終を計〳〵く。已ゝ人々命ゝゝゝ。さまゞゝを息んゝ免
七ぬゝ命の程ゝ心遣る〳〵ゝ。頃く旅舍ゝ沙汰るべ〳〵心落着く待

ゆへとの人び表太き大きふ悦びゆふ再生の恩ありとく畏こるものひ
りるふ。親族も彼方よ集ひ居まで此事を。頓よ伝せ知らりけまで再
見え奉ゆく。重ゆる禮とも述べ〜と暇を乞さぞ立出る。其より表太一周
法。旅舎ふ立帰ゆく。是る光景を物語まで親族も変ゆもいろぞ大方
ゆ〜ぞ悦びく。縣令の沙汰をぞ待うけるが。程ゆく一日縣令ゆる。此一件の
者ふと召ま其時縣令宜ふゆう是る境と犯ふ等閑ゆ〜ね罪ふ〜〜犯権
渠ゆ必らぶも。犯〜罪を憐こゆひく。免七ゆ死を免し。國の境と放つべ〜と。
人命せ〜まとゆ〜く免七を獄屋〜う率出〜。張六ふ渡さまう再縣令
宜ふゆう。彼地獄寺の悪法師其よ従ふ盗者ふ行方知らゆものゆ〜ゆ。
直ふ應捕ゆく其々の厳科ふ行まん。さまで此後汝ふゆ怨も頓て晴ぬべ。

退さく時節を待べ〜と。宜ふ詞ふ畏こゆ各省を退ん出ね。偖も人々ふ免
七を率〜く古郷ゆ。鎌倉さ〜く帰り来ふけまで張六ゆ妻礒辺とゆ。
娘荏草も免七ゆ恙ゆこ身を悦ひゆ。其時張六ふひけゆふ。さまでゆ是て
免七ゆ命ゆりふ許さまで。國の境ふ住事を禁めらるまで詫方ゆ〜。
是も結び〜縁ゆまで。吾智ゆ〜〜。頓ふ古郷へ贈ゆ〜〜。
詞をゆく娘荏草ふ胸奥さく涙ゆ。八人ふ向ひくひけゆふ何ゆる過
世の悪縁ふ。斯る憂身よ逢べ〜と。思ひもよらぬ事ゆ〜。さまで
婦人の身の上ふ。一度夫と定めゆ〜〜ゆ。左ても右ても其人ふ従ふ
ゆぞ操ゆ〜と。さまで八十更人両親の。ゆさん程ふ斗〜まで。庶幾ゆ吾
身ふ。長き暇をゆ〜く。夫ふ従へゆ〜。斯落魄と成〜身を見離さん

て心憂く。ゆひ侍まゝ吾家ゆ。さるべき者を取そく。家を継せの人かゝと。侘る我母ハ打聞て。汝をいとるゝ仏ゆく。斯る詞を出まゝ〻凉官の罪を浮て。流人と成て対を。斯墓しみて思ふまゝ。ゆきゞ夫婦の縁と志の。殷と定めるゆゆ。ゆ〻深かゝ〻中ありしと。罪ゆる者ゆ添せゞ〻。唯仮初ゆ親同士の言交しなるの縁ゆ心迷ひく両親を。捨るゝ〻左だるゆ。不孝の子ゆゝをゆゝざりしがいとる天魔の見ゆまゝ〻と。念ゆく〻言まゝ。傍ゆ免七聞兼て。荘草ゆ向ひひけゝ。斯だりかのまゝを恵ゝ。御志を添まゝ。今母君の宜ふゝ。年月かく〻も愛を思ひ育ゆひゆ。其親ゝ〻我跡ゆ。共ゝ立ゆんしゝ。不孝の罪の恐ろ〻しゝ。御心ゝ已も。率ひ参らをてハ思ゆる主君ゆ言ゝ〻ゞ。とゞゝ

ゆひく〻主の家を継ゆふて本意ゆまゝと。詞を尽〻く諫まゝ。荘草ゆ左右の答もゆ。差俯向くゞ哭ゆる。げゆ父母の目前ハゆゆゝ言ゝ東まく。明白ゆ其とも言兼まゝ。言ゆ交さく此ゆ〻ゆ。活別るゝとゆゆ。ひとゆゆ歎を侘ぶ心の中ゞ哀ゆる。張六ゆ始ゆ。二人ゞ心を思ゆ答ゆ泊せゞ居〻ゞ今又斯く若竈を見離〻難ゝとゆひ出〻。娘ゞ心を思ゆひゆ。尚更胸のふさぐく。世の理を言解べき。便もゆゝゞ左右もゆゞ唯官の掟まゝ。詮方もゆ別まゝと。詞少ゆひゆ〻ゆ開〻そく渠ゞ父表太ゆ斯る事譯を述まゝ父子ハ各ゆ別まゝ告く古郷ゆる。六浦の郷ゞ帰りける。偖も免七ハ危き命を免まく。父の家ゆ立帰りけるゞ。ゆる日彼地獄寺ゆ。走出折ゆ。剛る山路の庵まく。ゆゝるゆ

荏草かち
て兎七平
別れとを
哭く
表太
兎七

張六
いそべ
えがら

見えつる。女君の事速やかに。父の表太が使まゐり〜く。且つ敵を尋ねん
との志をも止め置しが。已ぐうくが法ゝひく此夜父が語るべきせろるの隙
もあらざるまでなるを日を送り〜ぐ。家が帰りく漸々と。父が向ひく
先比井出の郷へく彼女君が見え〜光景。且亡君の妾なる。小磯を害ひ
奉り〜。件の法師ハ地獄寺へく。吾輩友を害ひ。法師が決く紛き
なり〜と。ひの合せ〜。小々の。光景審が話説。表太るがくうち驚き。
年比日ごろひの侘く。なが掛ぢ〜。幼君の。何ひひるや山住の庵が斯く
在せば〜と。さ〜ぞ直が彼郷へ尋ね到りく女君を此方へ迎へ奉り。左
へも右へも手ふべ〜と。表太ハ旅の装〜ら國の境を悼まぞ。免七を家が
残し。渠が審の文を書せ。夫を證が携乃へく。頭が表太ハ足柄の藪が近き

井出の郷へ道を問ぐく尋ゆきぬ

第十回　靈前の遺文　乞兒の怪力

且説妻が又彼井出の郷なる垂水老少なる。先つ比及不意亡父うくの從
者なるとゆゑ〜者の一子とこそ。免七が出會く。甚さぐなる話説が。
彼悪法師が光景を。始く母の歌と知るべ。今ハ中々其仮が過べうも
なえざるべ。渠が在所を探さんと。ひふよ免七押止め。僕一先古郷へ帰り
斯る様子を告知らせ。再妻が詣すべく。先其まぞの暫時の間待せの
と止めぬ。之安さ〜〜免七が其音信を片瀬衆共。今日く〜と待侘く。
一日二日と過せ〜。やく弥生の花も散初時鳥告ぬるまで。只一言の

消息も。めゝ多び重氷のやう。容貌も女々〳〵拙きまでも。自も一個の壮夫なり。俱に天を戴ざる。親の讐と仇のうち。何空々と他人の力を待ん謂まゝ〳〵。表太が子と云ものゝ。流石に武士と商人と。両道かゝ〳〵愁意の人の如き憑きて。何日まぐ〳〵是く日を送らん渠が詞の違ぎ。先彼寺の光景をも。忍く密に伺ひ見んと。究めく已のゝ心構ひ〳〵つゝ。斯る光景を明自く。審に語〳〵祖母さるの自ぐらへを案ずゝ。中々其ゝ兎さまでとゝを碎き居〳〵けるに。一日に背戸の園圃に。片瀬が至り〳〵間を伺ひ。文を〳〵めく佛間なる。親の位牌に打向ひく。生る人の言ぐく。思の意を物語るゝ。暫時の暇をゆへ〳〵と涙ぐ〳〵に独ごち。件の文をさ〳〵置法。又足柄の方に向ひ。今か自を出まで。

老の人まる母人。ゆゝさ〳〵く深く愛〳〵。育らまに〳〵情をも。捨るのゝ殊更に八十歳にまさる老の身を独残〳〵出ゆゝを。さゝそ法まる〳〵覚ゝ。庶幾い氏神の憐ゝ。ゆく老の身を責く已が帰るまぐく。健に守らせのゝと。掌を合せ法く〳〵拝ゝ。密に忍び装ひ〳〵。守刀の一刀を。襟身に添く隠〳〵。身ゆゝ襤褸裂を打纏ひ。物乞に正し様を変破小笠を傾け。吾家を忍びく出ゝ。かく〳〵垂氷る唯一個ゝ〳〵くも立く。道を開ぐ程るく。笹根の山路にさ〳〵かゝまで。彼兎十が詞ゆ。詞を知方に山深く。尋入法く。凍りゆく松柏枝を交へつ。苔滑る深山路ゆく。まぐ咲残る桃山吹問へども更に物言ぬ花に折々見法まども。苔ゆる人ゝゆゝぐ〳〵。森の茂ゝを打越えゆく。斧に打撫げ一個の

壮夫。径の方より出来まで。垂氷嬉しく問ける。此はてうしろ[illegible]及ぶ地獄寺と呼ぶ山寺なり。何の方ゆく侍るらと。人を壮夫うち黙き。美より遥西の方半里余りを隔てゆく。彼山寺の有しとかくしぶ先つ頃より悪僧住人を害しく衣を剥取往旅人を悩せしなり。其由今ぞ聞えぬ。応捕の人々至りぬるぬ。速悪僧等ぬ逃散く。更ぬ行方も知まさぬ。応捕ぬ空く帰らまてと。此頃ぞ人々なり。彼古寺も破懐しと。人の噂ぬ聞まぬ。汝斯処ぬ問ひゆくとも。法施の浮物を有ざるべし。空き寺を問んとす。鎌倉道ぬ立出て。物乞ぬ方ぞましなる。とのつ恠き嚢より。東し飯を採出し。與へく其まく往過ぬ。是ぬ山賤ぬも。情ありとぞ知りけり。垂氷ぬ最々畏こと。貰ひし飯を押載き。斯る情を受ること。身を

顧まぬ破まてる。襤褸ぬ纏ぬ吾姿世を忍ぶとのひなるう。恥を知る武士と呼まし父の子と産まし。是浅ましく乞丐のうくと。ぬくぬ居し堂の握りし飯の飯粒より。飜る物を涙なり。是く垂氷ぬ生出し。松の株ぬ尻かけ。暫時憩ひぬるひけり。今山賤の語るをきけば。件の法師ぬ何処へ。走りつうんと。あの人ども。明白ぬ其とも知まぬ。殖と光景を探らんと。尚も山路ぬ走入りつ。漸く其処ぬ尋至りく。ぬまぬ瓦も墮かくく。扉傾く大門ぬまぬ内の光景を覗きぬまぬ唯一圓の空地ゆく。人の住べき堂舎もあくぬ。偖る実しぬ違ぬと。素の岐ぬ立つ。郷ぬ樵夫ぬ出合し。谷の岬路を。まるぬ。傍の森の茂の中ぬ何やらん人の咽く声しけぬ。最不審て光景を。ぬぬ。彼処ぬ乞児て。見貪き容なるぬと艶き少婦まし。

貴價金とゝ名ゆまび。掌ゆ納べきことのひけるを。一個ぶきくいひけゆ。巳も左ゝそゆるまびぞ率ゝそゝく連往んとゆゝ茂を踊り出。光景を垂氷只見ゝまび刃ゆ襤褸を纏ひつけ。山刀を帯へ。雲つくなるゆ二個の光棍眼つぶゝゆ色黒く。山賊とゝゆるゆ左方右方ゝろ立狹く。ゆゝゆ汝ゝ何処ゆをむ乞児ゆまび是る山路の物乞ゆ人もゆきてせぬ路を過きるものゆぞと。問へど垂氷ゆ顧ゝく。自ゝ都の者ゆゆ。東の方へ下まるゝく。道ゆく母を見失ひ。迷ひく爰へ伝まりと。詠ゆゆび二個の悪徒さゆ巳等汝を率く。母をも尋ねく得さまべし。中々爰ゆ深山路ゆく。東の大路ゆゝぶまび見失ひたる汝ゞ母も。迎も此処ゆ見當るまじ。ゆそ知方せん此方へ来ゝと目配ゝつ二人ゝく。垂氷ゞ左右の手を採く。森の茂ゆ率入るまび。

垂氷心ゆゆゆやう。此奴等自を女ぞと。ゆひくいゆる事をせんと。巧ゝく茂ゆ率入るらんと。二人の者ゆうち向ひ。大路の方へ知方せんと。今言まゝゞがのゝふゝく。斯る茂ゆ率来ゆふと。ゆゝび打咲ゝ巳等ゞゆゆ從ふゆるゝゞ。是乞食をせんとゝゆ大磯とゆゆ賑へる。郷ゆ率くゆた住まべし。さまをまび母をも尋得く。共ゆ栄花の身とゝまべし。いゝふゝくと悪徒ゆへ。倶ゆ左右の手を採く。中々少も緩さまび。垂氷ゝ声をゆと勅誘て正るゝとをびゝゝゆひそ。自ゝ東ゆ下るゝ身ゆゆ。見許ゝゆとゝゆ。佗まび。光棍等ゝ氣を苛ち。此奴勅誘ゝく面倒るゝ。手巾口ゆ食せよと。二人の悪徒まゝるゆゝ。手懲ゆせんと引居まび。今まゞく女々ゝく應合ゝ。垂氷ゝゆを居兼ゝく。健とゝとゝゝゝゝゝゝ汝等侮まる。乞児ゞ手並是

垂水性力
悪棍等を
打懲す

見ると捕へ一個が手を拂ひ逆ふ取ると引ぱり合ひが佛很打せて投出せば。
兇漢一個も肝を消し。捕へんとも振放ち。逃んとする所走かり。襟髪
掴み引寄せが乞兒の女を辱めんと。彼処ふ寝くまそと側の谷間へ投
墮せば投倒さまで。一個の悪徒是へ剛者なり去るべき。乞兒の少女何その。
車のわんとこりぞふ起直りて大手を廣げ。飛かゝるを垂氷なく。巳そ
聊健氣なり。と左足を揚て磴と蹴倒し。巳も俱ふ寝く待とのひつ目
より高くさらめば。同ど谷間ふ投墮ちる。公地ちやう形勢なり。垂氷ハ
心静々と。傍の石ふ尻なゝく。脚絆の紐を締直しつゝふ。谷底をさら
覗きつゝあるが。やうく二人も起直り。仰天まく形勢なく。乞食の
少女ふ。是怖ぢも有物なと。一個がひぐさまで。渠女をそなもあゝと。

井出の郷なる老女が許ふ客を
造りしる男児のありくいと容色産まるゝ語やうが。或を墮く其
者の是乞食とるゝ。わるざるけると打語るを。垂氷密ふ笑をき。
偖も是奴ふ彼蟠竜ふ。従ふ奴と和ぎまう。さまをまび雖言も此ま。
忍び居るとも斗ゝまで。さまび渠ふ手懸りなり。捨置まで引返し。
ふたゝび谷間へ走下りまび悪徒ふ驚き騒ぎ。又女が来まるとそ走
出ぎ前面ふ一筋の谷川あり。暫跟蹤其ひまふ。垂氷を頻ふ走はさそ。
やゝ汝ふ問ふとあり。一個が腕を。採て此方へ引戻し。一個を髻ひき
緬ぎ。力任せふ蹴倒せば。その仆倒まく動えぞ。垂氷傍を顧まび柚入が
手業を伐倒し。置ぎ襷の大木あり。是そ幸ひ是奴ふ足械めまさ得

物をとうち笑ひ法捕て。一個の胸を拳を固め一當あつまべ手留得
ぞ仰向に反く倒さう。垂水を件の大木の根の元に採く引抱へ倒さ
て二に投懸まべ一個を足を挫まべ。一個を左の腕を引敷るまべ二人とも。
憑と叫ぶを彼大木の端に垂水の尻くまべ。悪徒ホまさでぶのと醜き
髭面を嗚く俱に叫び詫べ。垂水の尻の力を緩め。汝ホ嚮に二人しくうち
語をる風聞に地獄寺の住僧あり。蟠竜が事語りしが渠そのさう
謂ありく。已探せる者あるまべ渠に従ふ汝ホと聞に有由に知ねべ。明白に
語るべし。さらば此仮汝ホら命ぞ助くべ。若ひさらも詐らば辛めんせん
と責問へば悪徒等を打問へ。今更何をか已むべき自ホに彼蟠竜に従ひ居
者あるべ先づ比及地獄寺へく。其處に宿り旅人等を害く物を

奪取に従ひ。小悴の忍びく一個逃うせ。さらば此事官に告へ
て應捕のあらんとく。彼蟠竜に隅ぶ。何處をさてう逃失ぬ自等を
此うの山路に住く往来る人を剥取活業とるくちらの日を送る
今月のうく此所に見そ君ぞ容色さ乞食やうもあるとぶ意に
欲心發り。彼大磯に率くべ数ヨの金に成べきとぶ最々面色の
その艶さに引きまく。是る勇ましき君を既に厚くもんをうしぶ斯
たるを猛き少女とぶ何ぶ假初る歳を支くく今更に自を悔き
候へり。希くは已等が命たりへ助け更。さらば件の蟠竜が有所を知べ此
上へ何処へ行と少女子の言へ方へ告参らせん此事少も詐らじと泣
喚び詫けべ。垂水心に思へう。偖に先づ日色七が語りし件の地獄寺に

群居く渠等を害しける。無頼子等の在るるさへ幸ひ免七の代りく渠が朋友の讐を敵く得さんべしと。ひ定めくいけるを宜くも語りし者共なり。命を助けく得さんべし。走り堪くわるるとひつく谷間を走り出で。岩高きやうなる大巌の足踏みく曳とのひつ。力の任せく踏反せば。岸険崩るとく動くと。二人が上の墮かるを押の撃きく光梶等の。噫との声と喪共の。口より血を吐出し。二言と云もなく死くげり。さるど無水の如きなり。剣の術を奇々の。母の小銭の教しげ。力のやどる昔なり。世を憚るく斯なり。女の装ひく育けるを。自も深く慎くく。手荒き事をもなさんべ今の光景の吾なり。不審なるなり。流石を父の亂長の人の武勇を許さしし。勇士の意を受継しの。但い祈し足柄の神の力や添ふ。左も右も亂長が。世の在時の武勇も。中々少らぬ形勢なり。此折ふ一個の旅人五十年余りなるが少き嚢を背の負ひく。此深山路を過りしが遥の谷間の物音の聞くゆるえけるべ。何度と只見くるべ。一個の女山賊と二人の壯夫を。撃倒しく責呵む。形勢をいく驚きしが遥の谷を隔くるべ。光景い何とも知しく。恐ども甚怖しく死婦ぞと。暫しいくんく在るべ。早黄昏の程なく。殊更深き山路を帰る旅路の急がるべ心残しく過行ぬ。正是今此所を過る一個の旅人。是何人なるんく其貞趣い巻を更て。審ふ其処ふ説分べし。

嫩髻蛇物語巻之五終

仁和寺三丁目南 本家坂本氏製

貧福論 初編 十返舍九作 三冊 自画

全 二編 三冊 全 自画

豆州温泉考 六本 絳山翁輯 五冊 米花齋圖

この書は豆州の温泉を数ケ所の温泉場をあつめ七島の細覽すべく名所古跡はいうもさらなり人産物土地の風俗あるいはまたくの珍奇等をあつめのこるくまなくこれをしるしあつめ風雅にこのこと人々に座右をしてこれを珍重あり

全 一

全 三編 三冊 全 作画

軒並娘八丈 三冊 全 楚満人作画

全 二編 三冊 全 作画

全 三編 三冊 全 作画

全 四編 三冊 全 作画

和漢
西洋 書籍貸借販賣

大阪心齋橋傳法町角
群玉堂河内屋 岡田茂兵衛